昔話法廷

論点表（手持ち資料）

第6話「浦島太郎」裁判

浦島太郎（検察側証人）

検察官の質問

・浦島太郎は、子どもたちにいじめられていたカメを助けた。「お礼をしたい」と言われ、竜宮城に招かれた。
・竜宮城で3年過ごして地上に戻ったら300年経っていた。
・竜宮城での1年が、地上での100年だと聞いていなかった。
・浦島太郎が、玉手箱を開けたら、中から出て来た煙を浴びて老人になった。
・煙の正体は、浦島太郎が竜宮城で過ごす間に地上で過ぎていた“300年の時間”。
・検察官は、同じ煙を使った実験映像を見せた。煙をあびたハムスターが白骨化した。
・浦島太郎は、たまたま浜風が強かったおかげで、老化するにとどまり一命をとりとめた
（⇒もし、直撃していたら、ハムスター同様、白骨化し命を失っていた）。

弁護人の質問

・浦島太郎は、竜宮所にいる間、乙姫とはとても仲が良かった。
・浦島太郎は、地上に帰る直前、乙姫から、『お腹に子どもができた』と告げられた。
・浦島太郎は、親になることや、ずっと海の中で暮らしていくことなど、いろいろこわくなって、乙姫と子どもを残して地上に戻ることにした。
・浦島太郎の心ない言動が乙姫を追い詰め、犯行の原因になった。

カメ（弁護側証人）

弁護人の質問

・浦島に別れを告げられた乙姫は、痛々しいぐらいに落ち込んでいた。何が正しくて間違っているかわからない、精神状態だった
（⇒カメの主観でしかない）。
・乙姫は、玉手箱を持って遠ざかる浦島を追いかけ「開けないで！」と叫んだ。自分の過ちに気付き、犯行を思いとどまろうとした。
・浦島は、「開けないで！」という乙姫の言葉を軽く聞き流した。

検察官の質問

・「開けないで！」という言葉は、浦島太郎が開けたくなるように仕向けるための言葉。
・本当に犯行を思い止まろうとするなら、「開けないで」ではなく「返して」と言うのが自然（⇒危険な箱は、まず回収するべき）。
・乙姫には、「裏切った男は絶対に許さない」という冷酷な一面があるのかもしれない
（⇒そばで仕えているカメは、「そんな人ではない！」と強く否定している）。

乙姫（被告人）

弁護人の質問

・乙姫にとって、浦島太郎と過ごした3年間は、楽しい日々だった。
・竜宮城ではずっと一人だったので、2人で過ごす時間が幸せだった。
・地上に帰る直前、乙姫から「あと1分だけ一緒にいて」と言われた浦島太郎は、「じゃ、あと1分だけね」と言って、時計の秒針が1周するのをじっと眺めていた。その心ない仕打ちがきっかけで、乙姫は、浦島太郎に殺意を抱いた（⇒深く傷つけられたからといって、人を殺そうとしてもよいか？）。

検察官の質問

・乙姫は、犯行に及ぶ前に、生まれてくる子どもに、どのような影響があるか考えていなかった。
・乙姫は、実刑になったら、刑務所の中の病院で子どもを生み、その子とは離れて暮らすことになる
（⇒子どもと離れて過ごすことで、どんな影響があるか？）。
・乙姫には、子どもと離れて暮らす時間が必要だ。一番大切にしなければならないものに気付けるし、刑務所で罪を償えば、子どもと向き合いやすくなる（⇒その時間がなければ、どんなことが起きるか？）。

最終弁論

検察官の主張

・未遂に終わったとはいえ、浦島太郎は多大な苦痛を受けた。乙姫も苦痛を受けるべき
（⇒浦島太郎は老化し、知らない時代で生きていかなければならない）。